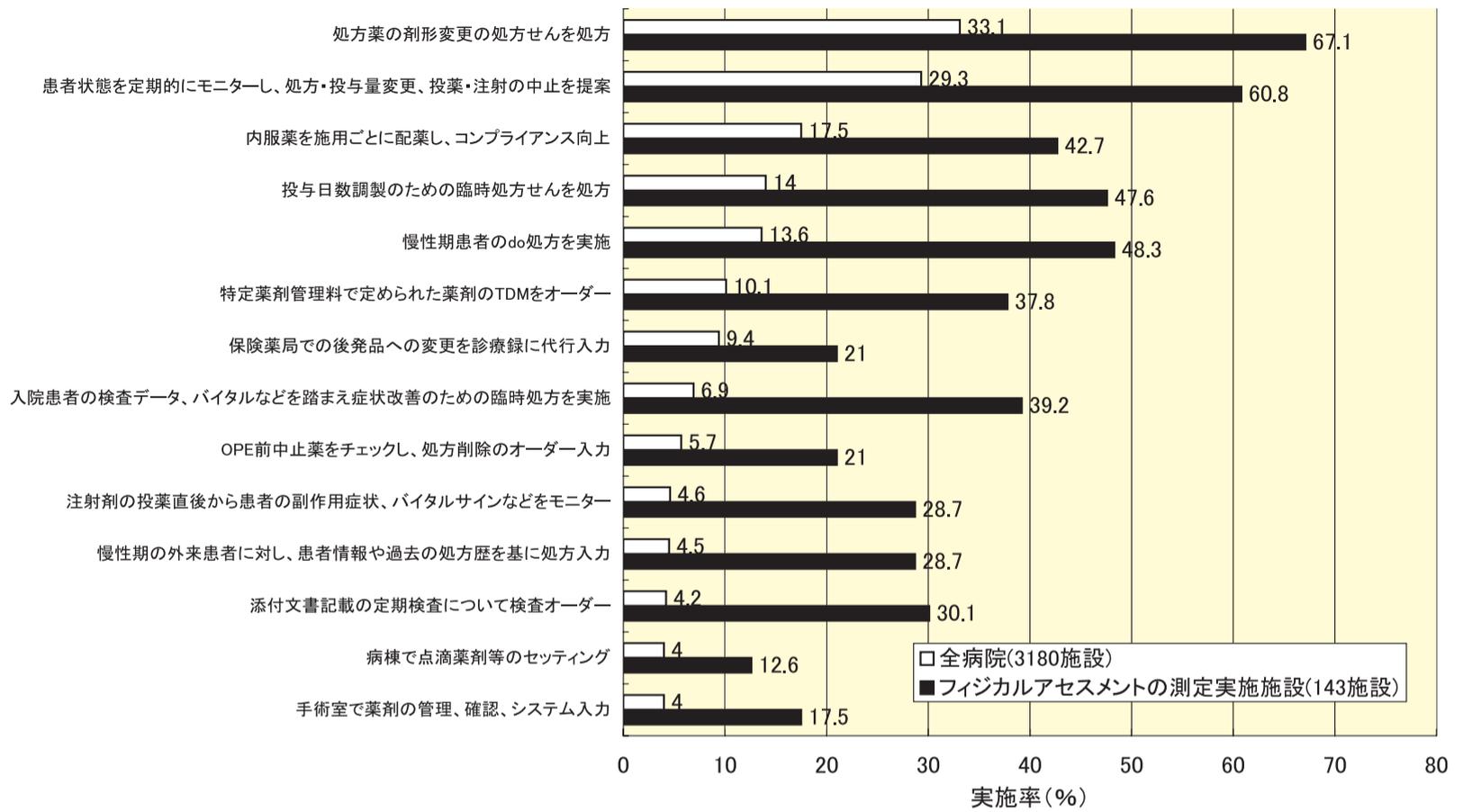


フィジカルアセスメントの測定を実施している施設の業務取り組み状況



外来処方せん調剤から病棟へと進化してきた病院薬剤師業務だが、今後は剤形変更処方や処方変更の提案、レジメン作成の提案、さらにはフィジカルアセスメントの測定などへと発展していくことが求められる。こうした識者の見解を裏打ちする調査結果が、日本病院薬剤師会(日病薬)によりまとめられた。

日病薬は、チーム医療の中で薬剤師が果たすべき新たな業務展開を明確にする目的で、調査を実施した。調査は、こういった新しい業務が、すでに現場で取り組まれているのかを明らかにするものだ。

既存の業務に加え、新たな業務として多くの施設で取り組まれているのは「処方薬の剤形(散薬・錠剤・一包化等)変更の処方せんを処方」で、3割以上の施設が取り組んでいた。次いで多かったのが「薬物療法中の状態を定期的にモニターし、処方変更、投与量の変更、投薬・注射の中止を提案」で、3割弱が取り組んでいた。

まだ少数ながらも、さらに先進的な取り組

直接的な情報収集が必須

今後の薬剤師業務を展望

日病薬

現場の実際を調査

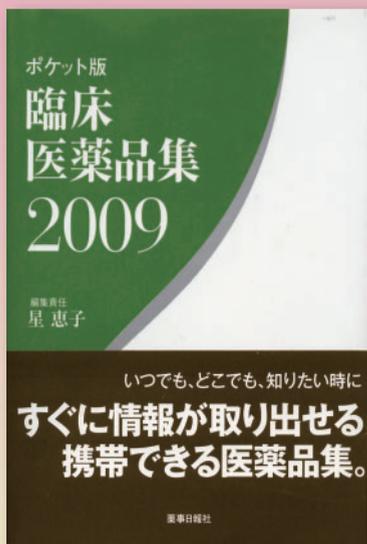
みの回答も見られた。具体的には、「副作用予測や回避に必要なフィジカルアセスメントの測定」「添付文書記載の必要な定期検査について、検査オーダー」「混合調製した点滴薬剤などのセッティング」は、およそ4%が実施していた。

重要な点は、フィジカルアセスメント測定を実施している施設では、新たな業務展開をより積極的に展開しているという点だ。調査結果によると、剤形変更処方全体施設の3割が実施していたが、フィジカルアセスメント実施施設に限ってみれば7割近くが行っており、2倍以上の開きが出ている。

do処方の実施については、全施設でみれば1割強の実施率だったが、アセスメント実施施設は半数近くが行っており、4倍近い開きが見られた。このほか、専門薬剤師のいる施設でも、多くの業務に積極的に取り組んでいることが分かった。

こうした調査結果から、日病薬では、今後の病院薬剤師の業務展開について、病棟への常駐、カンファレンス傍聴、カルテ閲覧など間接的な情報収集では不十分としている。そして、こうした業務だけでなく、必要に応じて触診や聴診といったフィジカルアセスメント、脈拍や血圧などのバイタルサイン測定など、患者状態の経過観察による直接的な情報収集が、薬剤師職能として求められることを示した。

大幅に見やすくなり、内容もグレードアップ!!



ポケット版 臨床医薬品集 2009

好評発売中

いつでも、どこでも、持ち歩ける
ポケットサイズの医薬品集!!

A6判(ポケットサイズ) 2色刷り
1,046頁 定価 4,200円(税込)

編集責任 星 恵子
(昭和薬科大学薬物治療学教授、
聖マリアンナ医科大学難治研究員教授)

薬事日報社 <http://www.yakuji.co.jp/>
書籍注文専用 FAX 03-3866-8408